令和六年度　学力検査問題

（専願・アスリート専願）国語

注意　これは問題冊子で、解答用紙は別にあります。解答は、必ず解答用紙に書きなさい。なお、検査の終了指示があったら、すみやかに解答用紙を裏返しにして、廊下で待機してください。

受検番号	

加茂暁星高等学校

〔問題一〕次の文章を読んで、問いに答えなさい。

大学進学をきっかけに一人暮らしをすることになった「ぼく」は叔父の紹介で、ある木造二階建ての家を紹介してもらった。
その家はつい最近まで前の住人が住んでいたが、亡くなってしまい、家具の引き取り等はなかった。以下はそれに続く文章である。

入学式の数日前、その家へ移り住んだ。荷物は鞄（かばん）ひとつだけ。家具は前の住人の物を使わせてもらう。

最初に子猫の鳴き声を聞いたのは、引っ越した当日、居間でくつろいでいた時のことだった。声はaニワのどこかから聞こえてきた。気のせいだと思い放っておくと、いつのまにかそいつは家へ上がり込んでいて、人間のぼくよりも家主面してくつろいでいた。両手のひらに収まるような、白い子猫だった。下見の時は、どこかに隠れていたらしい。前の住人が飼っていたペットのようで、飼い主のいなくなった後も、そのまま家に住み着いているのだろう。当然のように家へ上がり込み、歩きまわった。首に鈴がつけられ、澄んだ音を響かせた。

ぼくは最初のうち、そいつの扱いに戸惑った。家に①こんなおまけがあるとは、伯父から聞いていない。一人きりになりたかったのに、子猫と暮らさなければいけないなんて［ I ］だ。どこかへ捨ててこようかと思ったが、そのままそっとしておくことにした。居間に座っていて、子猫がトコトコ目の前を通ると、つい正座してしまった。

その日は隣に住んでいる木野という奥さんが挨拶にやってきて、どっとつかれた。彼女は玄関先に立ち、A品定めするような目でぼくを見ながら世間話をした。できるだけこのような近所との付き合いはbハイジョしたかった。

彼女は、音のすごい自転車に乗っていた。金属をこするようなブレーキの音が、何十メートル離れていても聞こえてくる。最初は不愉快だったが、そのうち、あれは②斬新な楽器なんだと思うことにした。

「私の自転車、ブレーキが壊れかけているのかしら？」と彼女。

「たぶん、もうすでに壊れているんだと思いますよ」とは言えなかった。

だが、前にこの家で生活していた住人のことに話題が移ると、身を乗り出して聞いた。以前、この家に住んでいたのは、雪村サキという若い女性だった。よく、カメラを持ってこのあたりを散歩し、町の住民を撮影していたという。町の人からは、ずいぶんc慕われていたようだ。しかし三週間前の三月十五日、玄関先で何者かに刃物で刺され、命をなくした。犯人は見つかっていない。

ぼくの隣人は玄関の床板をじっと見つめた。自分の立っているところが犯行の現場であることに気付き、ぼくはあわてて一歩、後退した。詐欺だ。伯父からは③そんな話、一度も聞いていない。事件のあった当時、といってもつい最近のことだが、多くの警察がこの家に来て、たいへんな騒ぎだったらしい。

「彼女の子猫、突然、雪村さんがいなくなって、きっと困っているでしょうねえ。餌をあげる人もいなくて」

彼女は帰り際、そう言った。

ぼくには子猫が困っているようには見えなかった。毎日だれかが餌をあげているかのように健康そうだった。家のゴミ箱に、中身の無いキャットフードの缶が捨てられていた。つい最近だれかが開けたらしい。知らない間にだれかが家へ上がり込んで、餌をあげたのだろうか。

子猫はまるで、雪村が死んでしまっていなくなったことに［ II ］。白く短い毛をなめ、d縁側に寝そべり、ずっと以前からそうしていたであろう平和そうな日常を続けてい

た。それは、子猫が鈍感であるのとは、少し違うように思えた。

eナガめていると、しばしば子猫は、そばにだれか親しい人がいるかのように振る舞った。最初のうち、気のせいかと思っていたが、それにしては④不自然な行動が多かった。

何もない空中に向かってあどけない顔をあげ、B耳をそばたてる。見えない何かからなでられているように、目を細めて気持ち良さそうな声を出す。

よく猫は、立っている人間の足に体をこすり付けるが、その子猫は何もない空間に体を押しつけようとして、空振りをして、「あれ？」といった感じで転びそうになっていた。そして、何か見えないものを追いかけるように、小さな鈴を鳴らして家中を歩きまわった。まるで、歩く飼い主を追いかけているようだった。子猫は、今でも雪村が家にいることを信じて疑っていないようだった。むしろ、新しく入居したぼくの方を不思議そうに見た。

最初、子猫はぼくの出す餌を食べなかったが、じきに、食するようになった。そこに至ってようやく、ぼくは⑤家に住む許可を子猫からもらった気がした。

（乙一『失われる物語―しあわせは子猫のかたち―』より）

問一　〰〰〰a～eの漢字は読みに、カタカナは漢字に直しなさい。

問二　═══A「品定めする」、═══B「耳をそばたてる」の意味として適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　それだと決めつける　　イ　相手の相談に乗る　　ウ　様々なものを見てまわる　　エ　注意して聞き取る

オ　嫌なことまで耳に入る　　カ　聞いていないふりをする　　キ　一つに決めきれない　　ク　優劣や善し悪しを決める

問三　［Ⅰ］・［Ⅱ］に当てはまる言葉を次から選び、記号で答えなさい。

Ⅰ　ア　平和　　イ　反則　　ウ　減速　　エ　光栄

Ⅱ　ア　気づいていないようだった　　イ　気づいているようだった　　ウ　気づかずにはいられなかった　　エ　気づいていないことはない

問四　――①「こんなおまけ」とは何を指すか、解答欄に合うように答えなさい。

問五　――②「斬新な楽器」とは何を指すか。本文中から抜き出しなさい。

問六　――③「そんな話」とはどのような話か、二十字で本文中から抜き出しなさい。

問七　――④「不自然な行動」とは何を指すか、適当でないものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　そばに親しい人がいるかのように接したこと

イ　以前いた飼い主を追いかけるように、歩き回ったこと

ウ　立っている人間の足に体をこすり付けること

エ　誰かになでられているようにふるまっていること

問八　――⑤「家に住む許可を子猫からもらった気がした」のはなぜか、本文中の語句を用いて答えなさい。

問九　本文中よりオノマトペ（擬音語・擬態語）を一つ抜き出しなさい。

〔問題二〕次の文章を読んで、問いに答えなさい。

青年期の入口では、親の a カチカンのもとにつくられてきたこれまでの自分のあり方を拒否し、親の分身ではない独自な人間としての生き方を b 模索するようになる。その際、もう親から干渉されたくないという気持ちが強まるため、親との接触において、ちょっとした言葉にも反発するなど、親からみれば①理不尽な反抗的態度が示されがちとなる。

それも、干渉されたくない、自分の判断を大事にしたいといった思いが強まるからだ。[A]、干渉を避けるため、親に対して[②]を持つようになる。

そのような親に対する閉鎖的かつ反抗的な c 構えをとることによって、主体的自己形成が進行していくことになる。

[B] 一方で、③こうした孤独な課題に取り組んでいる自分の不安や苦しみを一人きりでは支えきれないといった思いも強めていく。

児童期までは気持ちを分かち合ってきた両親との間に障壁を築くことによって生じる孤独や不安を和らげてくれる存在、この先どんな生き方を選択しどのような自分につくり変えていったらよいかがなかなか見えてこないことによる d アセリや不安を共有できる存在を求める。

そこで求められるのは、単に楽しく遊ぶだけの友だちではなく、軽いノリのおしゃべりで盛り上がるだけの友だちでもなく、自分の内的葛藤や不安といった暗い内面的な話も含めて何でも話すことのできる親友である。

こうして④タテの関係を支えとする生き方からヨコの関係を支えとする生き方への移行が行われることになる。

自分の内面を e 率直に伝えることを自己開示というが、僕が行った調査でも、児童期までは母親が主な自己開示の相手だが、青年期になると同性の親しい友だちへの自己開示が増え、その両者が主要な自己開示の相手となり、やがて⑤後者が主な自己開示の相手となっていくことが示されている。

⑥親しい友だちに対する自己開示が、とくに青年期を生きる者にとってもつ意義として、つぎのようなものがあげられる。

第一に、親しい友だちに自己開示し、相手から需要的な反応を得ることは自信につながる。親はまったく違う人生のステージにいるが、友だちは同じような内的経験をしていることが多く、共感的なやりとりになることが多い。それによって、自分はおかしいのではないかといった不安が低減し、気持ちが安定する。

第二に、親しい友だちに自己開示することは、自己への洞察につながる。自己に意識を集中したり、相手からフィードバックを受けることを通じて、今まで気づかずにいた自己の新たな面に気づいたり、もやもやしていたものがはっきりと見えてきたりする。

反対に、自己開示できないでいると、非現実的な不安や妄想に脅かされることになりがちである。

ただし、不安と動揺の中で自己評価がぐらついているだけに、人から心の中を覗(のぞ)かれることに非常に過敏で、他人に対して身構えがちであり、素直に心を開くことには抵抗がある。

そのため、⑦さみしさを痛切に感じ、心の内側までわかり合える相手を切に求めながらも、人を容易に近づけない雰囲気を醸(かも)し出すことになる。

（榎本博明『「さみしさ」の力』より）

問一　〰〰〰a～eの漢字は読みに、カタカナは漢字に直しなさい。

問二　[A]・[B]にあてはまる語として適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　例えば　イ　もし　ウ　だが　エ　つまり　オ　ゆえに

問三　――①「理不尽な反抗的態度が示されがちとなる」理由として適当でないものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　親の考えを押しつけられたり干渉されたりしたくないから　イ　自分の判断を大事にしたいという思いが強まるから

ウ　自分の態度から不安や孤独に気づき、察してほしいから　エ　自己の生き方を探したいという思いが生まれるから

問四　[②]にあてはまる語として適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　甘え　イ　いら立ち　ウ　秘密　エ　恨み

問五　――③「こうした孤独な課題」とは何か。本文中から抜き出しなさい。

問六　――④「タテの……生き方」とあるが、「タテの関係」「ヨコの関係」とはそれぞれどのような関係を指すか。解答欄に合うように答えなさい。

問七　――⑤「後者」とは何を指すか。本文中から九字で抜き出しなさい。

問八　――⑥「親しい……意義」として適当なものを次からすべて選び、記号で答えなさい。

ア　非現実的な不安や妄想に脅かされるが、それを開示できるようになる。

イ　自己観察や周囲からの指摘により、新しい自分を発見することができる。

ウ　相手から必要とされることにより、自信過剰になる。

エ　周囲に期待されることにより、不安に耐えられるようになる。

オ　共感的なやりとりが行えることから、気持ちが安定する。

問九　――⑦「さみしさ……醸(かも)し出す」とあるが、それはなぜか。解答欄に合うように本文中から抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。（句読点は除く）

問十　本文の内容に合致するものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　青年期の入口で子どもが反抗的な態度をとるのは、今までの親に対する不満が強まるからである。

イ　青年期になると、子どもは親とは異なる人間だという意識が芽生え、親に自己開示をしなくなるものだ。

ウ　青年期になっても、児童期に不安や苦しみを共有した友達には内的葛藤など、内面的な話を話すことができる。

エ　青年期になると、子どもは心の中を覗かれることに敏感になり、人との交わりを避けるようになる。

〔問題三〕

問一　次の文の――①「おいしい」、――②「よく」の品詞名をア～オの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

私はコーヒーが①おいしい喫茶店を②よく訪れる。

ア　名詞　イ　動詞　ウ　形容詞　エ　助詞　オ　副詞

問二　次の表の①～⑤にあてはまる文学作品をア～オの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

時代／ジャンル	物語	随筆	和歌
奈良時代	／	／	①
平安時代	②	③	④
鎌倉時代	／	⑤	／

ア　方丈記　イ　古今和歌集　ウ　源氏物語
エ　枕草子　オ　万葉集

問三　次の四字熟語の□に入る一字を答えなさい。

①　以心□心　②　一□一会　③　□田引水